

健康 コラム

在宅ケアには思いもよらない 不思議なパワーがある?!



まえだ みさ

前田 美佐

秋田厚生医療センター
秋田訪問看護ステーション 看護副師長

私は、在宅に訪問して、生活の場を拝見しながら看護する仕事をしています。近年、病院での入院期間が短縮化され、さまざまな病気を抱えながら在宅で療養を送られる方が増えています。そのような中で、私は在宅にはその療養者さんの潜在能力を引き出す、思いもよらない不思議なパワーがあるのではないかと、時々思うことがあります。その不思議なパワーについて、紹介させていただきます。

誤嚥性肺炎や脳血管疾患のため、口から食事が摂取できなくなり、中心静脈栄養や胃瘻からの経管栄養を開始されて退院された方の中で、在宅に帰ってからは、口からの食事摂取が可能になった方が数名おります。その中には、在宅で訪問歯科医から専門的にリハビリを受けた方もおりますが、ご本人の「食べたい」と思う強い希望とご家族の「食べさせてあげたい」という思いから実現した方が大半です。相談を受けた直後は、私でも「病院でできなかったのに、在宅でできるはずがない」と思い消極的でしたが、口や舌の動かし方や発声状況など確認していく中で、「もしかして食べられるかも?」に思いが切り替わり、リハビリテーション

ンとして訪問時に口や舌の運動・発声訓練を実施していききました。すると、入院中はほとんど発語がなかった方でも徐々に声を出すことが出来るようになったり、唾液でむせなくなってきたり、口や舌の運動も滑らかになってくる方もおりました。その後経過を主治医に報告し、許可が出るとゼリー一口から摂取開始し、念願のビールを飲むことが出来た方や、3食とも口から摂取し胃瘻を抜去した方もおりました。

そのほかに、認知症の方で、入院中に食事を摂れなくなり、ご家族が看取りで在宅を選択された方でしたが、ご家族の献身的なケアで経口摂取が可能になった方や、独居生活で寝たきりの方ですが、ヘルパーを1日3回利用し住み慣れた在宅で5年以上も過ごされている方もおります。又、不治の病気で、最期の時間を在宅で過ごしたいと希望された方の中に、在宅に帰ると病院では見られなかった表情や笑顔が見られる場合もあり、鎮痛剤の減量や余命宣告以上に延命された方もおります。

このように、在宅ケアの現場では、看護師の経験知だけでは理解しがたい、場面に遭遇することも多々あります。

又、病気以外のことでも、人としての命の重みや人とのつながり、人生の中で大切なもの、子育てについてや家族との向き合い方、困難な場面に直面した時の受け止め方など、ともに考え学ばせていただきました。このように訪問看護師が療養者さんやご家族のケアをしていく中で、実際は療養者さんとご家族の方が訪問看護師を育ててくれているのではないかと感じました。住み慣れた在宅であるからこそ、ケアの専門職としてではなく、人として語り合い、お互いを育て合っていくのではないかと、思うこともたくさん経験しました。

このことから、在宅ケアには、療養者さんの意欲が向上したり、活動量が広がるなどの潜在能力が引き出せる場だけでなく、私たち看護師にも人生経験を活かして教えてくれたこともたくさんあり、在宅ケアには思いもよらない不思議なパワーがあると感じています。訪問看護で出会った療養者さんやご家族の方々に育てられ、感謝の気持ちでいっぱいですが、これからも「在宅ケアの思いもよらない不思議なパワー」を広めていけたらと思っています。